

海外散歩

珍虫ハンター としての海外旅行記

その2

株式会社 スターラボ

佐藤 勝

破天荒トラベラー

日本においては全国制覇を簡単に達成出来たので次は世界を出来るだけ沢山の国へ訪れたい思いが強くなった。初期は日本人の誰もが訪れそうなメジャーな国を旅してきたが、達成するにつれ当然訪れる国が減るカウントダウン方式の旅を継続して、書籍の地球の歩き方は様々な国の情報を掲載している。但し、地球の歩き方やその他のガイドブックにも掲載されていない超マイナーな国への渡航を何回か試みている。

よく言われるのが何で聞いた事のないような国へわざわざ行くのか？治安が悪そうな国で昆虫採集していたら拘束されたり、犯罪に巻き込まれるのでは？と心配される。確かに過去に戦争や暴動があった国は日本人にとっては治安が悪いイメージが強くて殆どの日本人が行かないと思う。

でも、外務省のホームページを見ると治安が悪そうなイメージの国の危険度レベルは一番低い充分注意して下さいの注意喚起になっている事が多い。コモロ連合や沿ドニエストル共和国へ行くと話すと「どこにあるのその国は？危なくないの？」と言われたり、ルワンダとジブチへ行くと話した時もそうだったが、記憶に新しい湾岸戦争があったクウェートに行くと知人や家族に話したらすぐに止められ猛反対された。しかし、その頃はとくに戦争は終わっており、矢張り外務省の注意喚起は一番低いレベルとなっていたので反対を押し切って渡航した。

実際、そんな戦争の爪痕さえ残っておらず首都のクウェートシティは平和そのものだった。インドネシアから独立した東ティモールはティモール島のイ

ンドネシアとの国境付近は暴動が起きたままでそのエリアにおいては退避勧告が出ていた。

但し、首都のディリに至っては安全とは言い切れないが充分注意との注意喚起が発令されていた。滞在すると首都の暴動は収まっていたが、建物が壊れていたり、電柱が倒れたままになっており多少の被害の爪痕は残っていた。東ティモールはガイドブックもなく、言語もポルトガル語なので言葉が通じなかったが、いずれにしても治安の悪そうな国や言葉の通じない国へ渡航しても何事もなく無傷で帰国を果たしている。言い換えればトラブルらしい出来事に巻き込まれる事は皆無だった。

日本は治安の良い国として上位に挙げられているがその日本でさえも戦争を経験している。スイスのように永世中立国であれば戦争の不安はないが、いつこの国で戦争や暴動が起こるかは天気予報のように予告される訳でもなく流石に予想は出来ない。近年猛威を振るわせた新型インフルエンザのように予兆があれば様子を見て思い留まる事も出来るが、新型コロナウイルスのように収束すらままならない



クック諸島の珍しい三角コイン

感染症が全世界に広がってしまった事は誰が想像出来ただろうか？長年、治安が良くならない、イラク、北朝鮮はほぼ永久的に渡航するのが困難な国である。サッカーW杯予選で両国とも出場してくるが、情緒不安定でホームでの試合が困難で別の国で試合開催する事がしばしばある。私から見たらサッカーなんかやってる場合なのだろうかと思議に思う。2024年現在、ウクライナやイスラエルで戦争が起きていて終息の目途が立たない。筆者は戦争前にどちらの国も滞在したが、海外は怖くて行きたくないと言う人が割といるが日本においても、天災や事件、犯罪に巻き込まれる事があるので、日本人の私から見ればどこにしようが全て運命だと思って渡航を試みている。事件と言えば自分が勝手に事件を引き起こしてしまった事がある。それはネパールの首都カトマンズ市内でのホテル滞在中の出来事だった。初日はカトマンズ市内を散策し、日本よりも物価が安く、マフラーや登山靴を手軽に購入したので、翌日は近郊の、ブタニールカンタという街外れで購入した登山靴で軽いトレッキングを試みたが、この登山靴が異常に重く歩きづらくて靴擦れも起こし、痛みに耐えながら何とか目的地に到達した。しかしながら、かなり疲労がたまり転倒した際に泥が付いたり予想外の大汗をかき体を洗いたかったのでカトマンズのホテルに戻ってからすぐにバスタブにお湯をはった。お湯が溜まるまで、ベッドで仰向けになって休んでいると疲れでいつの間にかうたた寝してしまい、ふと目を覚ました時、部屋にある絨毯がビショビショになっていた。「ん！まさか・・・まずいお湯を出しっぱなしだった！」すぐにお湯を止めた時は客室から廊下へお湯が流れ染み込んでしまっていた。すぐにフロントに電話して、従業員と私が雑巾で何度もお湯を吸い出しては絞っての繰り返しで1時間以上かかってしまった。絨毯を弁償しろと言われなかったのと階下への水漏れはなかったので安心出来たのだが、帰国後に請求書がきても困るのでチップを何倍にもして渡し事件は解決した。ホテルでの事件といたら某有名ドラマの「姉さん！！事件です！！」を思い出



バハママカテルは地元民の膚



バハマ国のラスボス!?

す人も多いだろう。正にドラマにあるような事件を起こし迷惑をかけてしまった事に猛省している。

地球の選び方

2017年のこの年の時点で私は既に100ヶ国以上の国を巡り世界の半分以上の国を廻ってきたので、これから先どここの国へ行くにしても短期間では行かない、直行便の国はもう残っていない、毎日フライトがある国は既に達成しているので、選択肢も狭くて夏休みに行く国をどこにするか悩んでいた。候補としてニウエ、バハマ、アメリカンサモアを挙げ、最終的にはニウエを選択し、バハマ、アメリカンサモアに関してはこの後立て続けに行く事になり結局候補全ての国へ渡航する事になった。ニウエは南太平洋にボツンと浮かぶ島国で年中温暖な国である。早速、友人

でもあり某旅行会社に勤めている佐山氏にルートの照会やフライトスケジュール、料金を相談すると何とニュージーランドから週1便しか飛んでいないとの事だった。それに日本が夏で国内でも虫が採れるのでこの時期にわざわざニウエに行く必要がないかなと思い一度は断念した。代わりに佐山氏からニウエの近くにクック諸島という国があり便数も少ないながらニウエよりはまし、料金は11月なら最も安いという事で遅い夏休みをクック諸島で過ごす事に決めた。実際行ってみると、南太平洋はハリケーンのシーズンでもあり、深夜に到着したが物凄い風雨であった。どうやらハリケーンが翌日やってくるという事がわかった。翌朝、大雨が降っていたが、ほんの数時間だけ止んでいる頃を見計らって農道を散歩すると再び激しい雨と強風で一気に視界が悪くなり歩くのも困難になってしまった。逃げるように宿泊地へ戻ったが靴はビショビショになってしまった。この日の活動は小止みになった雨の中夕食を食べに再び外に出て、夕食を済ませた後の帰り道は月が照っていた。今頃晴れてきても翌日はもうこの国から過去入国した事のあるニュージーランドを経て日本へ帰らなければならなかった。しかし、寝るまでの間に宿泊場のコテージのカーテンを全開にしてバルコニーと部屋の全ての電気を点灯させて虫を誘き寄せた。するとそこそこの小さなコガネムシとカミキリが数種類飛来した。遅い夏休みだったが、夏と言えば国内のあちこちで盆踊りがあり、都内で東京音頭やバハママという曲がよく流れていた。バハマという国は知っていたが、バハママという曲は知らず何度も聴いている内に頭に残り、この年の年末年始旅行はバハマに決めた。

話はクリスマスイブに遡るが、今まで海外旅行してきた中でツアーを中心に一緒に海外旅行の御供をしてくれた親友のニックネームおっちゃん結婚式を挙げる事となった。

そんなおっちゃんから私に結婚式の司会をやってほしいとせがまれ受ける事となった。司会は初めての事で緊張していたけれど、その席で前代未聞とも言



珍婚旅行in Hawaii 左・中おっちゃん夫妻 右筆者



サモアの島常夏だあ〜よ〜♪

える、私の著書を宣伝する事も出来た。そう、司会を引き受ける代わりに宣伝させて欲しいというお互いの思いで取引成立したのである。そんなお祝い事の中、おっちゃんは新婚旅行は18/1/5からハワイに行くと言っていたが、私はこの結婚式の日に行われている競馬有馬記念の結果が気になり、帰宅し調べると約25万円当たっていた。そこでこの25万円を使ってアメリカンサモアに行く事を決めた。アメリカンサモアに行くにはハワイアン航空でハワイを経由してハワイから週2便のフライトで行ける事がわかり、1/5のフライトを選んだ。バハマから帰国したのが1/3で4日は仕事して中1日で海外というのは人生初であった。この日はおっちゃん夫妻の新婚旅行日でもあり、ハワイのコナ空港まで同便だったので羽田空港内で私は軽く変装して待ち伏せし、すぐに見破

られてしまったが事情を説明しおっちゃん夫妻を驚かせ、席こそ離れたものの3人でコナ空港までの旅行となった。おっちゃん夫妻はコナ空港で国内線に乗り換え、私は国際線でアメリカンモアへ行き別れを告げた。帰国日はお互い事前に話していなかったのだが何と帰国日も帰国便も偶然同じになりコナ空港で再会し、お互い住んでいる調布市迄一緒にの珍婚旅行となった。私はお邪魔虫だったけど、結婚してお子さんが出来たらもうおっちゃんと旅行するのは難しくなるので悔いはなかった。

更に話は遡るが11月のG1競馬で私は約93万円当てる事が出来た。クック諸島からの帰りにニュージーランドの空港でニウエ行のフライトをボードで偶然見つけ、93万円当たった勢いから強引に翌年2月のニウエ便をその場で予約した。

しかし、運悪くクック諸島同様、またハリケーン襲来に遭い2日間身動き出来なかった。3日目からは台風一過で良く晴れ、昆虫はクック諸島と同種が多かったが、チビクワガタという仲間の日本国内でも変わった生活をするクワガタが朽木から見付かった。夜行性であるクワガタは夜灯りに飛来するのは同種も同じだが、日中は朽木の中に潜り込み、他の生きた小昆虫の幼虫を食べる習性があり樹液を食べないのである。

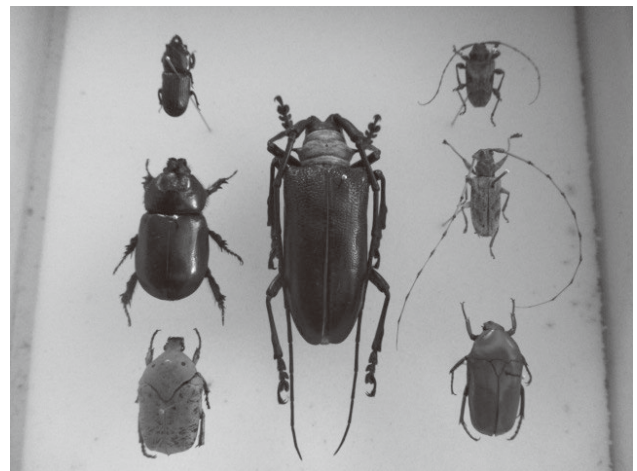
それとこの国の変わっている所は、国際免許証が即日発行可能で酒を飲んで運転しても問題ないのである。私は酒は飲まなかったが、車を借りたホテルから11キロ離れた警察署まで申請する為の移動なら無免許運転も認められる。

こうして、クック諸島、バハマ、アメリカンサモア、ニウエという珍国を旅したが、珍国は珍しい物があつたり変わった風習がある事に気付かされた。

クック諸島は三角形のコインを使用しているし、バハマは盆踊りだけではなく現地では有名なカクテル・バハマママを提供している。アメリカンサモアは日付変更線の右にあるが左には全く別のサモア独立国があり、サモア同士なのに文化も風習も全く違う。但し歌があるように両国共通でサモアの島は常



ニウエ版国際免許証



チビクワガタ ニウエ産 (左上) カミキリムシ クック諸島産 (右上) サイカブト クウェート産 (左中) カミキリムシ 東ティモール産 (中央) カミキリムシ アメリカンサモア産 (右中) ハナムグリ バハマ産 (左下) カナブンルワンダ産 (右下)

夏で、楽しいかどうかは目的次第なのでご自身で渡航して確かめてみて下さい。ニウエはニュージーランドから近年独立したばかりだが、ニュージーランドらしさが感じられず国際免許証も独特の物であった。

(日動協ホームページ、LABIO21カラーの資料の欄を参照)